

京都大学	博士(文学)	氏名	中 村 千 衛
論文題目	アイルランド語中性名詞の衰退に関する研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文はアイルランド語の歴史において中性名詞が衰退していく過程に関する言語学的研究である。全部で6つの章と補遺から成る。古期アイルランド語から現代アイルランド語の歴史のなかで、男性・女性・中性という三つの文法的「性」の対立は、中性が衰退することによって、男性・女性の二つの「性」のシステムに変化する。一般の見方によると、中期アイルランド語の時期に中性の衰退が起こったとされている。しかしながら、中期アイルランド語の写本である『赤牛の書』や『レンスターの書』、さらに現代アイルランド語の写本『キーティングのアイルランドの歴史』でも中性名詞の出現がなお認められる。本論文では中性名詞の衰退過程が無秩序に起こるのではなく、曲用タイプや文法カテゴリーなどの点からその衰退に一定の傾向があることを示す。また、アイルランド語の文法的「性」の消失は一定の期間に徐々に進行した言語変化であると主張する。</p> <p>第一章では、本論文の導入部として、文法的「性」に関わるこれまでの研究動向と、諸言語に見られる文法的「性」の機能、そして名詞に与えられる文法的「性」の付与基準の特徴について概観した。文法的「性」は語彙に恣意的に付与されるかのようにみえるため、これまで十分な研究は進んでこなかったが、近年第二言語習得や脳科学の分野も含めて、徐々に研究が進んでいる。まず、文法的「性」の定義として、Hockett (1958) による「名詞分類」に関わる定義について再考した。文法的「性」の機能としては、照応関係にある他の文法カテゴリーとの一致以外に、同音異義語の弁別や言語アイデンティティの表出などがある。また、名詞の文法的「性」が与えられる基準として、音声的基準と形態的基準があるが、実際にはそれらふたつが関連していることが一般に多くみられる。アイルランド語においては、主に形態的な基準で文法的「性」が与えられることが多い。例えば、古期アイルランド語の形式 <i>banmaic</i> 「女の子」の生物学的「性」は女であるが、この語の主要部 <i>ma(i)c</i> 「男の子」が男性名詞のため、<i>banmaic</i> の文法的「性」は男性である。その一方で、名詞の文法的「性」に形態的な基準よりも生物学的「性」が優先される例もみられ、統一的な基準を示すことは難しい。例えば、先ほどの古期アイルランド語の形式 <i>banmaic</i> 「女の子」は、徐々に生物学的「性」が優先されるようになった結果、現代アイルランド語では女性名詞として扱われている。</p> <p>第二章では、はじめに古期アイルランド語の中性名詞を示す特徴を示した。中性名詞に固有の特徴が現れるのは、冠詞(男性・女性単数主格・対格 <i>in</i> に対して中性単数</p>			

主格・対格 a)、人称代名詞(三人称男性単数 é、女性単数 i に対して中性単数 ed)、2 から 4 までの数詞(たとえば、中性形 da「二つの」の主格・対格形に後続する名詞の初頭子音が有声化・鼻音化するのに対して、男性形 da と女性形 di に後続する名詞の初頭子音は摩擦音化する)、形容詞 aill「ほかの」(中性形 aill に対して、男性・女性形は aile)、名詞(o- 語幹の曲用形式など)、中性名詞に後続する形容詞や名詞の属格に起こる初頭音変化(単数主格・対格形の中性名詞の後の修飾要素の語頭子音は有声化・鼻音化する)などである。中期アイルランド語では、古期アイルランド語の中性名詞が中性で現れる例と、男性名詞で現れる例が混在しているようにみえる。先にあげた中性名詞の特徴に基づいて分析を進めれば、中期アイルランド語における中性名詞の衰退にみられる一定の傾向と変化の一般的な方向を明らかにすることが可能となる。

第三章では、中性名詞の語幹タイプとその変異形に着目して中性名詞の衰退を探った。まず分析の対象としたのは、『赤牛の書』という中期アイルランド語の時期に完成した写本である。この写本は、違った時代の書記三人によって書写された。三人の書写個所に共通して現れる 9 つの中性名詞と、二人の書写個所に共通して現れる 5 つの中性名詞、合計 14 の中性名詞に注目してみると、出現頻度の高い o- 語幹名詞から中性の衰退がみられること、そして曲用が複数の語幹タイプにわたるようになった中性名詞には中性から他の文法的「性」、特に男性への移行が顕著であることが観察された。ほかの写本、『レンスターの書』や、『キーティングのアイルランドの歴史』などにおいても同様の観察結果が得られた。

o- 語幹名詞から中性の衰退がみられることに関しては、古期アイルランド語の時期の『ヴェルツブルグ注釈』や『ミラノ注釈』のなかで、o- 語幹名詞が既に中性として十分に認識されなくなり始めている。そして o- 語幹名詞の使用頻度が高いことがこの傾向を促進したと考えられる。また、複数の曲用タイプにわたる変異形を持つ中性名詞は、その帰属が判然としないために男性への移行が顕著になったということを主張した。

第四章では、第二章で見た中性に固有の文法的特徴のうち、特に重要な四つに注目して中性名詞の衰退の傾向をみた。その四つとは、冠詞、人称独立代名詞、数詞、aill「他の」、中性名詞を修飾する名詞の属格形や形容詞に特徴的な初頭子音変化である。この四つの特徴の有無を、第三章で挙げた『赤牛の書』に含まれる 14 の中性名詞に照らしてみても、冠詞は人称独立代名詞よりも高い割合で中性名詞に一致する傾向が認められた。同様の傾向が中期アイルランド語写本『レンスターの書』、『四行詩の詩篇』、そして現代アイルランド語写本『デジデリウス』、『キーティングのアイルランドの歴史』でも認められた。これは Corbett (1991) による「一致のヒエラルキー」で説明できる現象であると考えられる。「一致のヒエラルキー」とは、名詞とそれと共に起する要素の意味的な一致は、冠詞などの限定語句、述語、関係代名詞、人称代名詞

という順で強まっていくという階層関係である。従来、「一致のヒエラルキー」は、共時的な言語現象に対して当てはまると考えられていたが、アイルランド語の中性の衰退という通時的変化に対しても、一致の乱れはヒエラルキーの下位に位置するものから始まるということが分かる。

さらに、文法的「性」の付与に関しては意味的な基準が形態的な基準に優先されること、三人称中性単数の人称代名詞 *ed* の強調構文における機能が特化して、現代アイルランド語には不定代名詞になったことが、本章の分析から明らかになった。

また、アイルランド語の歴史で消失した中性名詞の特徴が現代アイルランド語の地名に残っていることがある。これは Bybee (1985) などによって論じられているように、出現頻度が高い語には言語変化が起こりにくいという傾向を例証する事例と考えられる。そしてアイルランド語が話されていない北アイルランド地方に中性形の特徴を保存する地名が多いことも分かった。

第五章では、ラテン語からの借用語にみられるアイルランド語の中性名詞について論じた。アイルランド語に最も多くみられる借用語はラテン語起源である。本章の議論の出発点は、アイルランド語にみられるラテン語借用語には中性名詞が少ないという観察である。McManus (1983) が分析した、アイルランド語内部の歴史において生じた種々の音変化の相対的時期を考慮に入れれば、個々のラテン語が借用された時期を特定化することがかなりの程度可能になる。この分析方法を用いることによって、紀元後 450 年から 500 年の時期以降に借用された語にはラテン語の文法的「性」が反映されなくなっていることが明らかになった。ただし、*óir*「金」といった、交易でもたらされたいわゆる文化的な語彙や、ラテン語を知る知識層によって用いられたと考えられる、*saltair*「詩篇」といった語彙、さらに紀元後 450 年以前にアイルランド語に取り入れられたと考えられる借用語は、ラテン語の文法的「性」を反映していることが多いことが分かった。

第六章では、アイルランド語の文法的「性」の衰退という言語現象が、他のインド・ヨーロッパ諸語と比べてどのような違いがあるのかということ进行考察した。インド・ヨーロッパ諸語で文法的「性」の衰退が起こるとき、衰退するのは中性である傾向が強いと Priestly (1983) は述べている。この点で、アイルランド語の中性の衰退は他のインド・ヨーロッパ諸語とほぼ軌を一にしている。ただ、アイルランド語の三人称単数人称代名詞 *ed* が不定代名詞としての機能が特化するようになったことは、Priestly (1983) のインド・ヨーロッパ諸語の文法的「性」衰退の傾向に沿わない事例である。また、アイルランド語の中性の衰退は、急速に起こった言語変化ではなく、数百年という期間にわたって、徐々に進行した言語変化で、いまだに現代アイルランド語で衰退せずに残っている中性名詞もある。

最後に補遺として、本論の考察において重要な役割をはたす中期アイルランド語写本『赤牛の書』にみられる中性名詞のデータを包括的なかたちで提出した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、アイルランド語の歴史のなかで中性名詞が衰退していったプロセスについて論じた実証的な研究である。印欧祖語の時期には、名詞のジェンダー（文法範疇としての性）については共通性（有性）と中性（無性）の2つのみであったと現在では考えられている。そして祖語からアナトリア語派が離脱して以降に共通性が男性と女性に分かれた結果、サンスクリット語、ギリシア語、ラテン語などの古典語にみられるように、男性、女性、中性という3つのジェンダーが対立する体系が成立した。他方で、現在も使用されている印欧諸語については、ドイツ語のようにこの古い体系を保持している言語もあるが、スウェーデン語やノルウェー語のように男性と女性の対立を失った言語、またフランス語やイタリア語のように中性を失った言語もある。本論文の対象であるアイルランド語は最後のタイプであり、古期アイルランド語の時期、6世紀から10世紀には男性、女性、中性の3つのジェンダーがあったが、現代アイルランド語では中性が男性に融合した結果、男性と女性だけになっている。本論文は、文献資料から問題の解明に有効な用例を根気強く収集したうえで、個々の用例に対して綿密な言語学的解釈を施すことによって、このジェンダー体系にみられる変化の歴史を明らかにすることに成功している。

古期アイルランドにおいて中性名詞と男性名詞とのあいだの明示的な区別は、名詞の主格と対格にみられる形式的特徴および名詞を修飾する形容詞や冠詞などの形式的特徴に認められる。さらに名詞句の場合は名詞に後続する形容詞の初頭子音が交替することもある。たとえば、男性単数主格形の *fer becc* ‘a little man’ に対して、中性単数主格形の *crann mbecc* ‘a small tree’ では名詞に後続する形容詞の初頭子音が鼻音化する。このような中性と男性のあいだにみられる弁別の特徴は古期アイルランド語の時期には一般によく保持されているが、例外もあることがこれまでも指摘されていた。

論者は中性名詞衰退の実態を跡付けるために、違った時期に書かれたいくつかの文献資料を対象にして、それらのなかで使われている中性名詞がその本来の特徴を保持しているかどうかを体系的に調査した。対象とした資料は、ラテン語聖書に書き込まれた多量のアイルランド語の注釈である『ヴェルツブルク注釈』（8世紀）、『ミラン注釈』（9世紀）、『4行詩の詩篇』（10世紀）、『赤牛の書』（11世紀から14世紀初め）、『レンスターの書』（12世紀）、『デジデリウス』（17世紀前半）、『キーティングのアイルランドの歴史』（17世紀後半）である。なお、14世紀から16世紀にかけてはまとまった文献資料が書き残されていない。これらの個々の資料の分析結果を歴史的な観点から解釈すると、古期アイルランド語の時期の『ヴェルツブルク注釈』と『ミラン注釈』では中性名詞の特徴が概して忠実に保存されているが、中期アイルランド語初めの『4行詩の詩篇』では次第に中性名詞の特徴が失われ、現代アイルランド語の『キーティングのアイルランドの歴史』では特定の慣用句や地名以外では中性名詞の特徴はほぼ

消失していることが分かる。また論者が2009年にアイルランド国立大学に提出した修士論文で扱った『赤牛の書』にみられる特徴も、この分析結果によく合致する。『赤牛の書』はオリジナルの写本自体は残っていないが、11世紀から14世紀にかけて3人の書記の手によって写し直された多数の物語である。3人のうちの2人の書記が写した箇所は中性名詞の本来の特徴をかなり反映しているが、残りのひとりの書記の担当箇所は中性名詞が衰退しつつある中期アイルランド語の状況に近い。前者の書記2人はオリジナルを忠実に模写したのに対して、後者の書記はオリジナルを当時の言語使用の実態に合うように書き改めたと考えられる。

アイルランド語の中性名詞の衰退がかなり長期間にわたって徐々に進行した言語変化の結果であるという論者の主張は、男性名詞にみられる興味深い変異形からも裏付けられる。中性名詞の衰退の過程のなかで、男性名詞が中性名詞の特徴を帯びている用例がかなりみられるという指摘は特に注目に値する。この事実は、中性名詞が男性名詞に一方的に吸収されたのではなく、中性と男性の弁別が希薄になっていくなかで本来男性であった名詞も中性と認識されることがあり、中性と男性のあいだで揺れながら最終的に男性名詞に収斂していったことを示している。

以上、述べたように、本論文はアイルランド語にみられる中性名詞の衰退を十分な資料的裏付けのもとで論じた実証的で、堅実な成果といってよい。しかしながら、本論文にも問題はいくつか残されている。まず多くの文献資料から重要で興味深い用例を包括的に収集・整理したことは高く評価されるが、その言語学的解釈を提示するにあたってはやや表面的で、深みを欠く結果になっている。また、議論の展開に飛躍があり、論者の意図を正しく汲み取るのが困難な箇所もある。もっとも、このような点は本論文の価値を著しく損なうものではなく、むしろ論者の今後の研究に期待すべきところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2012年2月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。